

1 2 変数関数の微分

開集合・閉集合： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ と $r > 0$ について

$$U(\mathbf{x}; r) = \{\mathbf{y} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{y} - \mathbf{x}| < r\}$$

を，中心が \mathbf{x} の半径が r の開円盤とよぶ（ここで $\mathbf{z} = (z_1, z_2) \in \mathbb{R}^2$ について $|\mathbf{z}| = \sqrt{z_1^2 + z_2^2}$ ）。

- $U \subseteq \mathbb{R}^2$ が開集合とは， $\forall \mathbf{x} \in U, \exists r > 0, U(\mathbf{x}; r) \subseteq U$
- $C \subseteq \mathbb{R}^2$ が閉集合とは， $\mathbb{R}^2 \setminus C$ が開集合

(注) これから $S \subseteq \mathbb{R}^2$ で定義された 2 変数関数 $f: S \rightarrow \mathbb{R}$ の， $\mathbf{x} \in S$ における連続性や微分可能性を考えるが，普通は $\exists r > 0, U(\mathbf{x}; r) \subseteq S$ という状況で考える（このことを，ここでは「 f は \mathbf{x} のまわりで定義された」とぼかして表現する）。こうなっていないと気持ちわるいからである。

連続性： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわり S で定義された $f: S \rightarrow \mathbb{R}$ が， \mathbf{x} で連続とは

$$\lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}} f(\mathbf{x} + \mathbf{h}) = f(\mathbf{x}).$$

(注) $\mathbf{x} = (x_1, x_2)$ として， ε - δ 論法で明示的に書き下すと：

$$\forall \varepsilon > 0, \exists \delta > 0, \forall (z_1, z_2) \in S, \sqrt{(z_1 - x_1)^2 + (z_2 - x_2)^2} < \delta \Rightarrow |f(z_1, z_2) - f(x_1, x_2)| < \varepsilon.$$

(全) 微分可能性： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわりで定義された f が， \mathbf{x} で微分可能とは（ここで $\mathbf{a} \cdot \mathbf{h}$ は内積）

$$\exists \mathbf{a} = (a_1, a_2) \in \mathbb{R}^2, \lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}} \frac{f(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - f(\mathbf{x}) - \mathbf{a} \cdot \mathbf{h}}{|\mathbf{h}|} = 0. \quad (1)$$

(注) 微分可能であることは，偏微分可能性と区別するため，しばしば全微分可能ともよばれる。

偏微分可能性： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわりで定義された f が， \mathbf{x} で第 i 方向に偏微分可能とは ($i = 1, 2$)

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(\mathbf{x} + h\mathbf{e}_i) - f(\mathbf{x})}{h}$$

が存在することで，この値を $\partial_i f(\mathbf{x})$ と書く。ここで $\mathbf{e}_1 = (1, 0), \mathbf{e}_2 = (0, 1)$ である。

(注) $\partial_i f(\mathbf{x})$ はもちろん「 $\partial_i f$ の \mathbf{x} での値」という意味である（ $f(\mathbf{x})$ はただの数なので，これの ∂_i は変である）。 $i = 1, 2$ に応じて， $\partial_i f$ は $\partial_x f, \partial_y f$ や $\partial f / \partial x, \partial f / \partial y$ とも書かれる。以下，第 1 方向と第 2 方向共に偏微分可能なことを，単に偏微分可能と略記する。

性質： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわりで定義された f について：

1. \mathbf{x} で全微分可能ならば， \mathbf{x} で連続である
2. \mathbf{x} で全微分可能ならば， \mathbf{x} で偏微分可能で $\partial_i f(\mathbf{x}) = a_i$ ((1) の記法を用いた)
3. f が \mathbf{x} で連続偏微分可能 (C^1 級) ならば， f は \mathbf{x} で全微分可能である

(注) このうち 3 は重要である (連続偏微分可能は「連続かつ偏微分可能」ではなく, 「偏微分可能で偏微分が連続」である). 証明の要点は,

$$f(x+h, y+k) - f(x, y) = (f(x+h, y+k) - f(x+h, y)) + (f(x+h, y) - f(x, y))$$

と変形し, 平均値の定理を用いることであった:

$$0 < \exists \theta_1 < 1, f(x+h, y) - f(x, y) = \partial_x f(x + \theta_1 h, y)h$$

$$0 < \exists \theta_2 < 1, f(x+h, y+k) - f(x+h, y) = \partial_y f(x+h, y + \theta_2 k)k.$$

ここまでで偏微分可能性は用いているが, 偏微分の連続性は用いていないことに注意しよう.

2 連鎖律

勾配ベクトル: f を $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわりで定義された偏微分可能な関数とする. \mathbb{R}^2 のベクトル

$$\text{grad } f(\mathbf{x}) = (\partial_1 f(\mathbf{x}), \partial_2 f(\mathbf{x}))$$

を f の \mathbf{x} での勾配ベクトル, あるいはグラディエントとよぶ.

連鎖律: f を $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわり U で定義された全微分可能な関数とする. γ が $t_0 \in \mathbb{R}$ のまわり I で定義された微分可能な関数 (注: $\gamma: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, t \mapsto (\gamma_1(t), \gamma_2(t))$ が $t = t_0$ で微分可能とは, γ_1, γ_2 がともに $t = t_0$ で微分可能なことと定義され, このとき $\gamma'(t_0) = (\gamma_1'(t_0), \gamma_2'(t_0))$ と定義する) で, $\forall t \in I, \gamma(t) \in U$ であれば, 合成関数 $f \circ \gamma$ も I で微分可能で

$$\frac{d}{dt} f(\gamma(t))|_{t=t_0} = \text{grad } f(\gamma(t_0)) \cdot \gamma'(t_0).$$

連鎖律の系 1: f を $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわり U で定義された全微分可能な関数とする. $\mathbf{h} \neq \mathbf{0}$ について, \mathbf{x} と $\mathbf{x} + \mathbf{h}$ を結ぶ線分が U に含まれるとき

$$0 < \exists \theta < 1, f(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - f(\mathbf{x}) = \text{grad } f(\mathbf{x} + \theta \mathbf{h}) \cdot \mathbf{h}.$$

(証明) $\gamma: [0, 1] \rightarrow U, t \mapsto \mathbf{x} + t\mathbf{h}$ として, $g = f \circ \gamma$ を考える. 連鎖律より g は $(0, 1)$ で微分可能で, $\forall t \in (0, 1), g'(t) = \text{grad } f(\mathbf{x} + t\mathbf{h}) \cdot \mathbf{h}$ である. g に平均値の定理を適用して, $0 < \exists \theta < 1, g(1) - g(0) = g'(\theta)$ だが, これを書き直したものが主張そのものである.

方向微分: f を $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわりで定義された関数とする. $|u| = 1$ なるベクトル $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2$ について

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(\mathbf{x} + h\mathbf{u}) - f(\mathbf{x})}{h}$$

が存在するとき, これを \mathbf{x} における \mathbf{u} 向きの f の方向微分とよび $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x})$ とかく.

連鎖律の系 2: f を $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ のまわり U で定義された全微分可能な関数とする. このとき $|u| = 1$ なる任意のベクトル $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2$ について, $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x})$ が存在し

$$\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x}) = \text{grad } f(\mathbf{x}) \cdot \mathbf{u}.$$

3 練習問題

(A1) 前ページの「証明の要点」の残りを完成せよ。

(A2) 次の方程式を求めよ。

1. 曲面 $z = x^2 + y^2$ の点 $(1, 2, 5)$ における接平面

2. 曲面 $z^2 = xy$ の点 $(1, 4, 2)$ における接平面

(A3) $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ として

$$(x, y) \mapsto \begin{cases} (x^2 + xy + y^2) \log(x^2 + y^2) & ((x, y) \neq (0, 0)) \\ 0 & ((x, y) = (0, 0)) \end{cases}$$

を考える。これが $\mathbf{0}$ で微分可能かどうか調べよ。

(A4) f は \mathbf{x} のまわり U で定義されており、偏微分可能で、偏微分は U で有界 (i.e., $\forall i = 1, 2, \exists K_i > 0, \forall \mathbf{x} \in U, |\partial_i f(\mathbf{x})| < K_i$) とする。 f は \mathbf{x} で連続であることを示せ。

(A5) 単に偏微分可能だけでは、全微分可能性は従わない。たとえば $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$,

$$(x, y) \mapsto \begin{cases} \frac{xy}{x^2+y^2} & ((x, y) \neq (0, 0)) \\ 0 & ((x, y) = (0, 0)) \end{cases}$$

は、次のようなものである：

– f は $\mathbf{0}$ で偏微分可能

– f は $\mathbf{0}$ で連続ではない (ので、全微分不可能である)

この他に、次のような関数 f が欲しい：

– f は $\mathbf{0}$ で連続かつ偏微分可能

– f は $\mathbf{0}$ で全微分可能ではない

$f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ として

$$(x, y) \mapsto \begin{cases} \frac{x^3}{x^2+y^2} & ((x, y) \neq (0, 0)) \\ 0 & ((x, y) = (0, 0)) \end{cases}$$

を考えると、そのような例になっていることを示せ。

(A6) 開集合や閉集合に関連して、以下を示せ：

1. $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ と $r > 0$ について、開円盤 $U(\mathbf{x}; r) \subseteq \mathbb{R}^2$ は開集合である (自明ではない！)

2. \mathbb{R}^2 の列 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots$ を考え、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \mathbf{a}_n = \mathbf{a}$ であるとする。今、閉集合 $C \subseteq \mathbb{R}^2$ について

$\forall n \geq 1, \mathbf{a}_n \in C$ となっているとすると、 $\mathbf{a} \in C$ を示せ。

4 練習問題

(B1) 以下の f について $\text{grad } f$ を求めよ.

1. $f(x, y) = x^2 + y^2$
2. $f(x, y) = ax + by + c$
3. $f(x, y) = xy(x + y - 3)$

(B2) 以下の f について, 指定された点と向きにおける方向微分を求めよ.

1. $f(x, y) = x^2y$, 点 $(2, -1)$, 向き $(1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2})$
2. $f(x, y) = \log \sqrt{x^2 + y^2}$, 点 $(-1, 1)$, 向き $(1/\sqrt{5}, 2/\sqrt{5})$
3. $f(x, y) = (x + y)^2$, 点 $(2, 2)$, 向きは最大増加の向き

(B3) $f: \mathbb{R}^2 \setminus \{\mathbf{0}\} \rightarrow \mathbb{R}$ を微分可能とする. $f(x, y)$ を極座標で $g(r, \theta)$ と書いたとき:

1. $(\partial_r g)^2 + (\partial_\theta g/r)^2 = (\partial_x f)^2 + (\partial_y f)^2$.
2. f が C^1 級ならば g は微分可能
3. 「 f が微分可能ならば g は微分可能」は正しいかどうか調べよ (おまけ)

(B4) f は $U(\mathbf{0}; 1) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < 1\}$ で定義された微分可能な関数とする. $\forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1), \text{grad } f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}$ ならば, f は $U(\mathbf{0}; 1)$ で定数であることを示せ.

(B5) (A5) において, 方向微分を考えることで, f が $\mathbf{0}$ で全微分可能でないことを示せ.

(B6) $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ は

$$\forall t \in \mathbb{R}, \forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2, f(t\mathbf{x}) = t^m f(\mathbf{x})$$

となるとき, m 次同次関数とよばれる (簡単のため $m \geq 1$ は自然数とする). f が微分可能であれば $x_1 \partial_1 f + x_2 \partial_2 f = mf$ を示せ.

(B7) 以下の $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ は, 全微分可能だが, C^1 級でないことを示せ (注: (A5) と合わせると, 「 C^1 級 \Rightarrow 全微分可能 \Rightarrow 偏微分可能」の \Rightarrow はどれも逆向きはいえないことがわかる).

$$f(x, y) = \begin{cases} (x^2 + xy + y^2) \sin \frac{1}{x^2 - xy + y^2} & (x, y) \neq (0, 0) \\ 0 & (x, y) = (0, 0). \end{cases}$$

(A1) $\Delta(h, k) = f(x+h, y+k) - f(x, y) - \partial_x f(x, y)h - \partial_y f(x, y)k$ として, $\lim_{(h,k) \rightarrow (0,0)} \Delta(h, k)/\sqrt{h^2 + k^2} = 0$ を示せばよい. 「証明の要点」より

$$0 < \exists \theta_1, \exists \theta_2 < 1, \Delta(h, k) = (\partial_x f(x + \theta_1 h, y) - \partial_x f(x, y))h + (\partial_y f(x + h, y + \theta_2 k) - \partial_y f(x, y))k$$

なので, 三角不等式より

$$\begin{aligned} \left| \frac{\Delta(h, k)}{\sqrt{h^2 + k^2}} \right| &\leq |\partial_x f(x + \theta_1 h, y) - \partial_x f(x, y)| \cdot \frac{|h|}{\sqrt{h^2 + k^2}} + |\partial_y f(x + h, y + \theta_2 k) - \partial_y f(x, y)| \cdot \frac{|k|}{\sqrt{h^2 + k^2}} \\ &\leq |\partial_x f(x + \theta_1 h, y) - \partial_x f(x, y)| + |\partial_y f(x + h, y + \theta_2 k) - \partial_y f(x, y)|. \end{aligned}$$

$(h, k) \rightarrow (0, 0)$ のとき, $\theta_1 h \rightarrow 0, \theta_2 k \rightarrow 0$ で $\partial_x f, \partial_y f$ は \mathbf{x} で連続だから, $\partial_x f(x + \theta_1 h, y) \rightarrow \partial_x f(x, y), \partial_y f(x + h, y + \theta_2 k) \rightarrow \partial_y f(x, y)$. よって $\Delta(h, k)/\sqrt{h^2 + k^2} \rightarrow 0$ がわかった.

(A2) 1. $\partial_x z = 2x, \partial_y z = 2y$ より, $z = 5 + 2(x - 1) + 4(y - 2)$.

2. $z = \pm\sqrt{xy}$ であるが, 今問題になっているのは $z = \sqrt{xy}$ のほうなので, $\partial_x z = \sqrt{y/x}/2, \partial_y z = \sqrt{x/y}/2$ である. よって $z = 2 + (x - 1) + (y - 4)/4$.

(A3) 微分可能である. $\lim_{h \rightarrow +0} h \log h = 0$ (詳細略) に注意すると, $\partial_x f(\mathbf{0}) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{h^2 \log(h^2)}{h} = 0 = \partial_y f(\mathbf{0})$. さらに $f(\mathbf{0}) = 0$ なので, $\lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}} f(\mathbf{h})/|\mathbf{h}| = 0$ を示せばよい. $\mathbf{h} = (r \cos \theta, r \sin \theta)$ とおくと ($r > 0, 0 \leq \theta < 2\pi$), $x^2 + y^2 = r^2, xy \leq r^2$ より, $|f(\mathbf{h})/|\mathbf{h}|| \leq 2r^2 \log(r^2)/r = 4r \log r$. $\mathbf{h} \rightarrow 0$ は $r \rightarrow +0$ と同値なので, $\mathbf{h} \rightarrow 0$ とすると $f(\mathbf{h})/|\mathbf{h}| \rightarrow 0$ となる.

(A4) $K = \max\{K_1, K_2\}, \Delta(h, k) = f(x + h, y + k) - f(x, y)$ とする. 「証明の要点」より

$$0 < \exists \theta_1, \exists \theta_2 < 1, \Delta(h, k) = \partial_x f(x + \theta_1 h, y)h + \partial_y f(x + h, y + \theta_2 k)k$$

なので, 三角不等式より $|\Delta(h, k)| \leq K(|h| + |k|)$. よって $\lim_{(h,k) \rightarrow (0,0)} \Delta(h, k) = 0$ をえる.

(A5) $(x, y) \neq (0, 0)$ であれば $\partial_x f = x^2(x^2 + 3y^2)/(x^2 + y^2)^2, \partial_y f = -2x^3y/(x^2 + y^2)^2$ はやさしい. $h \neq 0$ のとき $f(h, 0) = h, f(0, h) = 0$ から, $\partial_x f((0, 0)) = 1, \partial_y f((0, 0)) = 0$ もわかる. したがって f は偏微分可能である. $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とすると ($r > 0$), $|\partial_x f| = |\cos^2 \theta| |1 + 2 \sin^2 \theta| \leq 3, |\partial_y f| = |-2 \cos^3 \theta \sin \theta| \leq 2$ より, $\partial_x f, \partial_y f$ は \mathbb{R}^2 で有界である. よって (A4) が適用できて ($\mathbf{x} = \mathbf{0}, U = \mathbb{R}^2$ とする), f は $\mathbf{0}$ で連続であることが従う. f が $(0, 0)$ で全微分可能でないことをいうには, $\lim_{(h,k) \rightarrow (0,0)} (f(h, k) - h)/\sqrt{h^2 + k^2} = 0$ 「でないこと」を言えばよい. $(h, k) = (r \cos \theta, r \sin \theta)$ とすると, $(f(h, k) - h)/\sqrt{h^2 + k^2} = -\cos \theta \sin^2 \theta$ なので, これは $r \rightarrow 0$ としても θ に依るので, $\lim_{(h,k) \rightarrow (0,0)} (f(h, k) - h)/\sqrt{h^2 + k^2}$ は存在しない.

(A6) 1. $\mathbf{y} \in U(\mathbf{x}; r)$ について, $\exists r' > 0, U(\mathbf{y}; r') \subseteq U(\mathbf{x}; r)$ を示せばよい. そのためには $r' = r - |\mathbf{y} - \mathbf{x}|$ ととれることを示せば十分である ($\mathbf{y} \in U(\mathbf{x}; r)$ なので $|\mathbf{y} - \mathbf{x}| < r$ より $r' > 0$ に注意). そのためには, 任意の $\mathbf{z} \in U(\mathbf{y}; r')$ について, $\mathbf{z} \in U(\mathbf{x}; r)$ であることを言えばよく, つまり $|\mathbf{z} - \mathbf{x}| < r$ を言えばよい. 三角不等式より

$$|\mathbf{z} - \mathbf{x}| \leq |\mathbf{z} - \mathbf{y}| + |\mathbf{y} - \mathbf{x}| < r' + |\mathbf{y} - \mathbf{x}| = r$$

と、望みどおり示された。

2. $\mathbf{a} = (x, y), \mathbf{a}_i = (x_i, y_i)$ とする. $\mathbf{a} \in \mathbb{R}^2 \setminus C$ とすると, $\mathbb{R}^2 \setminus C$ は開集合だから $\exists r > 0, U(\mathbf{a}; r) \subseteq (\mathbb{R}^2 \setminus C)$. 一方で $\lim_{n \rightarrow \infty} \mathbf{a}_n = \mathbf{a}$ なので, $\exists N > 0, \forall n > N, |\mathbf{a}_n - \mathbf{a}| < r$. これは $n > N$ ならば $\mathbf{a}_n \in U(\mathbf{a}; r) \subseteq (\mathbb{R}^2 \setminus C)$ を導き, $\forall n \geq 1, \mathbf{a}_n \in C$ に矛盾する.

- (B1) 1. $\text{grad } f = (2x, 2y)$.
 2. $\text{grad } f = (a, b)$.
 3. $\text{grad } f = (y(2x + y - 3), x(x + 2y - 3))$.

(B2) f が微分可能であることの確認は省略する.

1. $\text{grad } f = (2xy, x^2)$ より $\text{grad } f(2, -1) \cdot (1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2}) = 0$.
 2. $\text{grad } f = (x/(x^2 + y^2), y/(x^2 + y^2))$ より $\text{grad } f(-1, 1) \cdot (1/\sqrt{5}, 2/\sqrt{5}) = 1/2\sqrt{5}$.
 3. $\text{grad } f = (2(x + y), 2(x + y))$ より $\text{grad } f(2, 2) = (8, 8)$ で, 最大増加の向きはこの向きなので向きは $(1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2})$. この向きの方角微分は $(8, 8) \cdot (1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2}) = 8\sqrt{2}$.

- (B3) 1. 連鎖律を適用すると, $\partial_r g = \text{grad } f(x, y) \cdot (\cos \theta, \sin \theta)$. 同様に $\partial_\theta g = \text{grad } f(x, y) \cdot (-r \sin \theta, r \cos \theta)$. よって

$$(\partial_r g)^2 + (\partial_\theta g/r)^2 = (\partial_x f \cos \theta + \partial_y f \sin \theta)^2 + (-\partial_x f \sin \theta + \partial_y f \cos \theta)^2 = (\partial_x f)^2 + (\partial_y f)^2.$$

2. $\mathbb{R}_{>0} \times \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, (r, \theta) \mapsto (r \cos \theta, r \sin \theta)$ は連続なので, f が C^1 級ならば $g(r, \theta)$ は C^1 級である. よって g は微分可能である.

- (B4) 任意の $\mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1)$ について, $\mathbf{0}$ と \mathbf{x} を結ぶ線分は $U(\mathbf{0}; 1)$ に含まれることに注意しておく. 連鎖律の系 1 より $0 < \exists \theta < 1, f(\mathbf{x}) - f(\mathbf{0}) = \text{grad } f'(\theta \mathbf{x}) \cdot \mathbf{x} = \mathbf{0}$ なので, $\forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1), f(\mathbf{x}) = f(\mathbf{0})$ が示された.

- (B5) 方向微分の向き $\mathbf{u} = (u_1, u_2)$ を固定する ($u_1^2 + u_2^2 = 1$). $f(h\mathbf{u}) = hu_1^3$ より (ちなみにこれは $h = 0$ でも正しい), $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{0}) = u_1^3$ である. もしも f が微分可能とすると, $\text{grad } f(\mathbf{0}) = (1, 0)$ より (これは $\mathbf{u} = (1, 0), (0, 1)$ のときをそれぞれ考えるとえられる), 連鎖律の系 2 より $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{0}) = (1, 0) \cdot (u_1, u_2) = u_1$ となる. よって矛盾が生じた.

- (B6) $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ を固定して, $f(t\mathbf{x}) = t^m f(\mathbf{x})$ を t で微分すると, $\text{grad } f(t\mathbf{x}) \cdot \mathbf{x} = mt^{m-1} f(\mathbf{x})$ なので $t = 1$ とすると $\text{grad } f(\mathbf{x}) \cdot \mathbf{x} = m f(\mathbf{x})$. つまり $x_1 \partial_1 f + x_2 \partial_2 f - m f = 0$.

- (B7) $U := \mathbb{R}^2 \setminus \{\mathbf{0}\}$ で f は C^1 級である. 実際

$$\partial_1 f = (2x + y) \sin \frac{1}{x^2 - xy + y^2} - \frac{2x - y}{(x^2 - xy + y^2)^2} (x^2 + xy + y^2) \cos \frac{1}{x^2 - xy + y^2},$$

$$\partial_2 f = (x + 2y) \sin \frac{1}{x^2 - xy + y^2} - \frac{2y - x}{(x^2 - xy + y^2)^2} (x^2 + xy + y^2) \cos \frac{1}{x^2 - xy + y^2}$$

となっていて, これらは連続である. よって f は U で全微分可能である.

次に f は $\mathbf{0}$ で全微分可能なことを示そう (これは f が $\mathbf{0}$ で偏微分可能なことを導く). このためには $\lim_{(x,y) \rightarrow (0,0)} |f(x, y)|/\sqrt{x^2 + y^2} = 0$ をいえばよい (これは $\partial_1 f(0, 0) = 0 = \partial_2 f(0, 0)$)

を導く). 実際, $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とすると

$$|f(x, y)|/\sqrt{x^2 + y^2} = \left| r(1 + \cos \theta \sin \theta) \sin \frac{1}{r^2(1 - \cos \theta \sin \theta)} \right| \leq 2r$$

なので $r \rightarrow 0$ (すなわち $(x, y) \rightarrow (0, 0)$) のとき $f(x, y) \rightarrow 0$ となる.

以上で f が \mathbb{R}^2 で全微分可能なことがいえた. f が C^1 級でないことをいうには

$\lim_{(x, y) \rightarrow (0, 0)} \partial_1 f(x, y) \neq 0$ をいえば十分である. 今 $\partial_1 f(h, h) = 3h \sin \frac{1}{h^2} - \frac{3}{h} \cos \frac{1}{h^2}$ より $\lim_{h \rightarrow 0} \partial_1 f(h, h)$ は存在しない. よって $\lim_{(x, y) \rightarrow (0, 0)} \partial_1 f(x, y)$ も存在しない.